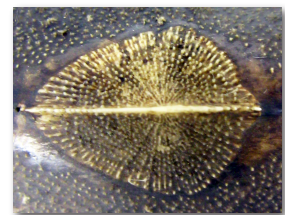




チョウザメ

島津製作所製造
全長 770 mm

京都府師範学校で使われていたチョウザメの剥製標本。外見上、軟骨魚類のサメ類に似ているが、硬骨魚類の1つに分類され、骨格の大半は軟骨で構成されている。長紡錘形の体に、蝶の羽に似た大型で板状の鱗を5列持つのが名前の由来で、背側には7~11枚(この標本では9枚)、体側には22~36枚(この標本では32枚)、腹側には6~10枚(この標本では7枚)の鱗が存在する。1基の背鰭と上葉部が下部より長い尾鰭とを持ち、外鼻孔は2対。口内には歯が全くなく、下顎腹側後方、口の前方にある4本の髭(この標本では欠損)で獲物を探知し、獲物を吸い込んで食料としている。一般のサメと大きく異なるところは鰓孔の数で、サメが5~7対の鰓孔を持つのに対して1個の鰓孔しか持っておらず、鰓蓋が存在する。産卵期には春型と秋型とがあり、秋型だと9~10月に川を遡上して越冬した後、産卵することとなる。かつては、産卵のために北海道の石狩川や天塩川を遡上する様子があったが、今ではみられなくなった。チョウザメの寿命は、70~100年ほどだとされている。(参考文献:生物学辞典(株)東京化学同人)



鱗上面: 背側4番目